

小学校における効果的な話し合い活動の実現を目指した
教科横断型授業
— 体育授業における国語の学習内容と接続させる
授業事例から —

高瀬 淳也¹, 中島 寿宏²

Cross-subject Learning Aimed at Effective Discussion Activities in Elementary School Physical Education
— A Case Connecting Learning Contents of Japanese Language and Physical Education —

Jyunya Takase¹, Toshihiro Nakajima²

Abstract

The purpose of this study was to examine the influence of cross-subject learning on the study of athletics by implementing unified worksheets from Japanese Language class in Physical Education. We examined the effects of the linguistic activities used in language classes on the “task-discovery” activities in athletic education. The participants were eight elementary school students—four male students and four female students—in a fifth and sixth grade class as well as the homeroom teacher. Firstly, the children learned how to expand and advance their ideas as well as express their thoughts on writing essays in language classes. Then, the children applied these methods—used for finding various options and viewpoints—to the “task-discovery” activities in Physical Education classes by using the same worksheets. As a result—even in physical education classes—based on the study contents of the language classes, students were made aware of their strength and weaknesses and they were able to realize their own tasks in exercise. Because of the worksheets, the children became able to have in-depth discussions and efficient “task learning” learning based on the way of thinking used in essay writing. In conclusion, the connection of language classes and physical education classes through the use of cross-subject learning strategies prompted the student’s use of “task discovery” in their exercise activities.

Key words : Cross-subject Learning, Physical Education,

-
1. 大谷大学
〒603-8143 京都府京都市北区小山上総町
 2. 藤女子大学
〒006-8585 北海道札幌市手稲区前田7条15丁目4-1

1. Otani University
Koyama-Kamifusacho, Kita-ku, Kyoto 081-0226
2. Fuji Women’s University
4-1, Maeda 7-jo 15-cyome, Teine Ward, Sapporo,
Hokkaido 006-8585

著者連絡先 高瀬 淳也
jtakase@res.otani.ac.jp

はじめに

近年、PISA 調査や全国学力・学習状況調査など国内外の学力調査結果において、我が国の児童・生徒は読解力や記述式問題に課題が指摘されている。このことを受け、2008年に改訂された学習指導要領では、思考力、判断力、表現力等の一層の育成が求められるようになった。また、「言語に対する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え、児童の言語活動を充実すること」（文部科学省、2008a）と示されており、教育現場では、言語活動の充実を目指した授業実践が数多く行われている。体育授業においても、作戦を立てたり、課題解決に向けた話し合い活動の時間を設定したりといった実践研究が行われているものの、その言語活動の効果が確認できているとは言えない。例えば、白旗（2015）の「現実に見た体育の授業では、『話し合いの時間を多く設定する』『学習カードの記述欄を増やす』など、言語活動の量的拡大をとりあえず組み込んだ授業が目についた」という報告にあるように、言語活動時間の確保が授業成果に繋がっていない実践もみられる。また、森（2014）は、話し合いの時間や学習カードへの記述が授業成果に結びついておらず、かえって運動時間の減少というデメリットのみが目につくと指摘している。実際、筆者が研究大会に参加することがあるが、「練習方法や作戦を考えたり、成果を振り返ったりするために話し合う活動などを充実」（文部科学省、2011）させようとするあまり、話し合い活動が機能していない上に運動時間が削られてしまうことに課題を感じる授業を参観することが多い。「言語を通じた学習活動を充実することにより『思考力・判断力・表現力等』の育成が効果的に図られる」（文部科学省、2011）と考えられることから、体育授業において学習成果に結びつくような言語活動の設定が必要不可欠であるものの、現場では課題がいまだに多いと言えよう。

ところで、現行の学習指導要領において、「指導の効果を高めるため、合科的・関連的な指導を進めること」（文部科学省、2008a）と示されているように、複数教科の学習内容を組み合わせることで相互的に効果を高めようという教科横断型学習の試みがある。先行研究を見ると、二五（2013）が英語の数の学習をする際に算数の計算活動を取り入れた実践報告、橋本ら（2011）がゴミ問題をテーマに小学校算数科・家庭科・社会科を横断した実践報告、石橋ら（2010）が小学校3年生を対象に理科と国語の「合科授業」の形態の実践報告などがある。これらの報告を見る限り、複数の教科を教科横断的に組み合わせることによって、限られた授業時数の中で効率的に授業を進められるとともに、学習効果も期待できる。

文部科学省（2011）は、言語活動について、「国語科で培った能力を基本に、それぞれの目標を実現する手立てとして、（中略）言語活動を充実させる必要がある」

と示しているが、これは国語科と他教科を組み合わせた教科横断型の授業として考えられる。すなわち、国語で学習した内容を他教科の言語活動として位置づけ、話し合い活動などで活用させることによって、児童生徒の思考力等の育成につなげることが可能である。これは体育科においても同様であり、体育授業の中で言語活動を通して児童生徒の思考力等を伸ばすことが重要であると考えられる。これまでに、国語科と他教科との教科横断型の先行研究では、蛭谷・田中（2015）が学級力向上を目指した国語科と道徳・総合的な学習の時間・特別活動を横断させた実践報告や、林（2003）が効果的なカリキュラム開発を目指し国語科と社会科・道徳、国語科と生活科・図画工作科を横断させた実践報告などがみられるが、体育科と国語科を横断させた報告は少ない。体育科との教科横断型の報告は中島他（2014）による体育の授業におけるICTを活用した実践報告が見られる程度であり、体育科と国語科を結びつけて言語活動を体育授業に取り入れた例はみられない。

そこで本研究では、体育授業における話し合い活動の活性化実現のために、国語科の「話すこと・聞くこと」の領域での学習内容と体育科の運動学習とを組み合わせた教科横断型授業を実践し、その学習効果について検証することとした。

研究の方法

1. 対象・期日

本研究は、北海道内にあるK小学校の5年生（男子2名、女子1名）と6年生（男子2名）の計5名の複式学級を対象とした。本研究対象を少人数学級にした理由は、少人数での授業・学習を観察することで、児童一人一人の運動及び動作への理解度や学習課題の発見などが、教科横断型授業を通してどのように変化するか、個別に評価しやすいためである。特に、本研究対象のような少人数学級では、普通規模学級よりも個人の変容について担任教師が把握しやすく、本研究の効果検証に適していると判断した。また、少人数学級では「集団思考を通じて思考の深化が期待しにくく、刺激不足で平凡な学習に流れやすい」「多様な発想や考えを持つことが苦手」「教師依存になりがちなこと」（全国へき地研究連盟、1998）という特有の傾向がみられるため、本実践による授業成果の検証が有効と考えた。

期日は、2015年1月下旬にかけて、国語科の授業を行い、その後2月中旬に体育の授業を実施した。授業者は担任教諭である40代男性（教職経験年数18年）であった。なお、本研究に当たり、授業実践の内容と研究成果の発表方法については、対象となった小学校の校長の協力のもと、小学校において保護者説明会を開催し本人・保護者の同意を得た上で実施した。

2. 授業の指導法について

本研究対象学級が5, 6年生の複式学級であることから, 学級担任1名で複式学年の児童を同時に指導する方法をとっており, 「指導内容の組み合わせを考慮したり, 指導方法の工夫が必要」(文部科学省, 2011)である。そこで本研究では, 国語授業は「学級を構成している上学年と下学年の児童生徒に対して, 学年ごとの教科書あるいは指導事項に沿った教材で指導する」(全国へき地研究連盟, 1998)学年別指導で行った。国語の教科書は, 教育出版株式会社編集局(2011)から出版されている小学国語「ひろがる言葉」の5年生及び6年生の下の教科書を使用した。また, 体育授業は「上・下学年に同時に同内容の学習を指導する」(全国へき地研究連盟, 1998)同単元(内容)指導で実施した。

3. 授業内容について

1) 国語授業の教材及び対象となる授業

本研究において話し合い活動を効果的に進めるためには, 「自分の考えについて, 理由や立場を明確にして説明すること」(文部科学省, 2011)が重要であると考えた。そこで, 国語の授業では「話す・聞く」にかかわる教材を取り上げることとした。5年生の授業は「目的や意図に応じて, 事柄が明確に伝わるように話の構成を工夫」することを指導事項とした「効果的に発表しよう」という教科書の教材で行った。この教材では, 調べたことを資料や見せ方を工夫することによって効果的に発表することが主な学習活動であり, 全7時間で構成した指導計画は表1の通りであった。このうち, 互いの立場や意図をはっきりさせながら計画的に話し合うことが主活動となる1~2時間目を研究対象とした。

表1 5年生国語 指導計画

第1次(2時間)	発表のテーマを決める。また教科書をもとに発表方法を考え, 発表会までの計画を立てる。
第2次(3時間)	必要な資料を集め, 発表内容を組み立てる。また集めた資料を整理し, 効果的な発表方法について話し合う。
第3次(1時間)	発表資料の作成, 発表練習をする。
第4次(1時間)	意図が効果的に伝わるように発表, 活動を振り返る。

6年生は, 「わかりやすく自分の考えをまとめて述べること」を指導事項とした「読書座談会をしよう」という教科書の教材を使用した。全4時間で, 学習内容は表2の通りであった。このうち, 本の紹介や友達の発表を聞いて自分の意見や感想を伝えることが主活動となる3~4時間目を研究対象にした。

表2 6年生国語 指導計画

第1次(2時間)	自分の興味のある本を探して読み, 感想や意見をまとめる。
第2次(2時間)	第2次読書座談会を行って, 本を読んだことを紹介し, それに対する意見を伝える。

2) 体育授業の教材及び対象となる授業

体育の授業は, 対象学級の規模を考慮し, 3対2を主教材としたゴール型(バスケットボール)であった。授業の教材や流れについては, ゴール型における3対2の授業プログラムを開発した鬼澤他(2008), 鬼澤(2010)の報告を参考に構成した。全7時間の指導計画は表3の通りであった。このうち, 児童が協力して話し合ったり, 実際に動きを試したりしながら課題の解決を目指した3~4時間目を研究対象とした。3~4時間目の授業の流れは, 「準備運動」「課題把握」「課題解決に向けた活動(個々に考えを書いて発表, 試しのゲーム, 話し合い活動など)」「3対2のゲーム」であった。へき地小規模学級の体育教育に関しては, 高瀬他(2014)をはじめとする研究報告(黒原(2015), 高瀬・中島(2015))があり, 授業実践や授業評価についてこれらの先行研究を参考にし, 授業計画を立て実践した。

表3 5・6年生体育 指導計画

第1次(2時間)	ボール操作技能の習得(ボールの送球・捕球の技能練習, ドリブル・パス練習, シュート練習)
第2次(2時間)	第2次ボールを持たないときの動きの習得(ボールを保持する人と自分の間に守備者を入れないように立つこと)
第3次(1時間)	パスを出すためのボール操作技能の習得(ピボット技能の習得)
第4次(2時間)	ゲーム大会

3) 教科横断のための方法

本研究では, 国語科で学習した内容の中で, 「自分の考えや意見を, 理由や根拠を挙げながら説明できる」ことを体育授業の言語活動と位置づけ, 話し合い活動に活用することを目指した。そこで, 国語の授業で使用した掲示物をそのまま体育授業でも使用し, 体育の授業でも国語で学習したことを意識しながら取り組めるようにした。国語と体育で使用した掲示物及び教科横断型授業の流れについては図1に示した。この掲示物では, 授業者が児童たちに対して, 「自分の考えに理由や根拠を挙げる」という国語の学習内容を体育授業の中でも意識させる目的で使用している。

4) 分析方法

体育授業研究の一つである事例研究は, 「VTRによる録画, カセットテープによる言葉の録音・再生, 特定の班および抽出児についての観察メモ, 小アンケートや感想文を子どもに書いてもらうこと, 授業で使われる『学習カード』『体育学習ノート』などを利用」(小林, 1995)し, 「可能な限り, 現実の指導場面そのものに接近しながら, そこに生じる事象の教育的な意味を解釈」(小林, 1995)しようとするのが重要と考えた。そこで, 本実践では教科横断型授業の有効性を検討するために, 授業内での児童の発言と学習カードの記述内容の評価を行った。いずれの分析も, 担任教諭と体育科教育学を専門とする大学教員の2名で検討し評価を行った。

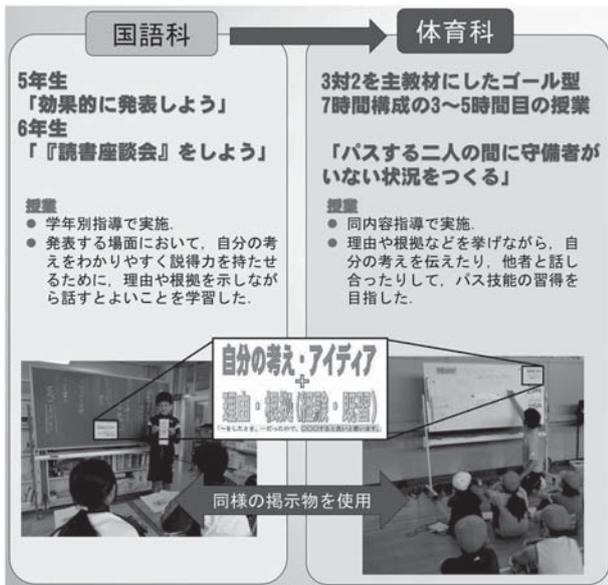


図1 国語と体育の共通の掲示物及び横断型授業の流れ

(1) ビデオ映像の観察による分析

対象となった国語と体育の授業を撮影した映像から、国語科で学習した「自分の考えや意見を、理由や根拠を挙げながら説明できる」ことが、体育授業においてどのように活用されているか、どのように学習効果につながったかについて評価した。

(2) 学習カードの内容による分析

体育の3～4時間目で使用された児童の学習カードの記述内容のうち、授業の導入時で記述した内容と、授業の振り返り時に記述した内容をもとに、児童の言語表現や記述内容の変容について評価した。

結果と考察

1. 国語の授業

<5年生の様子>

1時間目は、教科書の教材文の音読を行い、全8時間構成の単元で卒業する6年生に向けた発表を行うことについて授業者より説明があった。また、1～2時間目で発表テーマを決定するということが伝えられた。テーマを決める話し合いに向けて、教科書にある例文をもとに、自分の意見を述べる際には結論や立場を先に明確にする話し方が受け手にとって理解しやすいことについて説明があった。「私は○○がいいと思います。理由は～だからです」という話型について、掲示物(図1)を使いながら授業者による説明が行われた。その後、約10分間「好きな運動」「好きな教科」などを例題に、掲示物に示した話型を使って説明する練習が行われた。授業の後半には、テーマを個々に考える時間が設定されていた。

2時間目は、児童3名でテーマ決めが行われた。図1に示した掲示物を用いて、自分の考えに理由や根拠を合わせて伝えるとよいという前時の振り返りが行われ、友

達の考えを聞いたあとには、「～さんの考えは、…だからよいと思います。」など理由や根拠を挙げて感想を話すように伝えられた。

テーマ決めの話し合いでは、「6年生にこれまでお世話になったこともあるし、たくさん教えてもらったから、感謝の気持ちを伝えたいです」「僕も感謝がいいと思います。理由は、今まで児童会やクラブでもいろいろなことを教えてもらったし、感謝してもしきれないくらい、いろいろなことをしてもらったからです。」(下線は全て筆者)などの発言があった。児童3名とも、根拠や理由を挙げて説明しており、この間、授業者が介入することがほとんどなく、児童が積極的に話し合い活動を進めていた。

<6年生の様子>

6年生では全4時間の単元で構成した国語授業を実施した。3時間目の授業では、1～2時間目に選んだ本を紹介するための準備時間として設定された。教科書にある例文をもとに、本の紹介の際には本の面白さや魅力に触れるとともに、「不思議な世界が二重にえがかれているのが、おもしろいと思います」など、おもしろく感じた理由を挙げると相手に伝わりやすいという説明があった。その後、5年生同様に掲示物を使って基本の話型について指導があり、理由や根拠を挙げて説明する練習が行われた。授業の終末では、教科書にあった「自分の考えの根拠を示しながら、意見を述べる」という文を取り上げ、理由や根拠を挙げて説明すると自分の話をわかりやすく伝えられることを、授業のまとめとして確認をした。

4時間目では、6年生2名での読書座談会が行われた。座談会では、「この本を選んだ理由は、動物が主人公の本は、最近あまり読んだことがなかったので、楽しそうだなあと思ったからです。読んでいて、何か不思議な感じがしました。理由は、猫の目線で僕たちというか、人の生活の様子が描かれているからです」「社会で歴史の勉強では、あまり室町時代のことが出てこなかったので、室町幕府のことも知りたくて、この本を選びました。」「○○さんの紹介を聞いて、僕も読みたくなりました。理由は、坂本龍馬の活躍がくわしく説明されていて、幕末に本当に活躍したんだということが分かったからです」(下線は全て筆者)など、約20分間、理由や根拠を上げて本の紹介や感想を伝えあっていた。授業の終わりの感想で「今回は、(相手の)話が分かって、おもしろかった」「紹介してもらった本を読んでみようと思った」などの交流があった。

対象となった5年生と6年生は、授業で学習した「自分の考えや意見を、理由や根拠を挙げながら説明できる」が達成された話し合いであったと確認できた。

2. 体育の授業

体育では全7時間のゴール型(バスケットボール)単

元を構成した。1時間目および2時間目の授業については、主に個人技能の習得が主運動となるボール操作の学習を行っていた。ここでは、国語授業での掲示物は使用していなかった。3時間目では、ボールを持たないときの動きが課題として設定され、国語授業で使用した掲示物を児童たちに確認させることで、「自分の考えや意見を、理由や根拠を挙げながら説明できる」という意識を持たせながら話し合い活動を促すこととした。導入場面で、授業者はボール保持者が守備者に囲まれる写真を提示した。そして、ボール保持者を指して「どこにパスを出す」とよいか」と発問した。それを受け児童が学習カードに考えを記述した後、一人ずつ発表した。発表の際に理由や根拠を挙げて説明した児童に対して、授業者から「理由がはっきりしていてわかりやすい考えでした。」などの声かけがなされた。児童全員が発表した後、記述したプレーを実際に試す時間が設けられた。その中で、図2のようにゴールから離れてパスを受けるプレーが見られた際、表4のような話し合い活動が行われた。

この話し合い活動では児童から出された意見や考えを元に、「ゴール下が密集していた場合、ボールを持たない攻撃者がゴールから離れるように移動することでパスが成功しやすくなる」ということが全体で確認された。授業の終わりのゲームでは、児童がゴールから離れた位置へ移動してパスを受けるプレーが増加し、2時間目まで見られていた山なりのパスを守備者にとられてしまうプレーはほとんど見られなかった。

4時間目は、「守備者が近くにいる攻撃者がパスを受けるにはどうすればよいか」ということが課題として設定された。授業の導入部分で、図3のような場面が設定され、「(守備者が近くにいる攻撃者を指さしながら)パスをもらうために、どこに動く」とよいか」と授業者から発問がなされた。児童は、自分の考えを学習カードに記述し、発表を行った。この記述を行う際にも、掲示物に

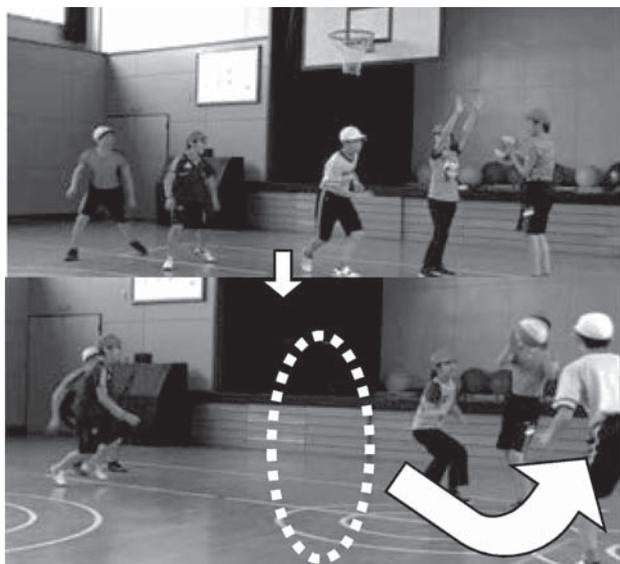


図2 3時間目 ゴールから離れてパスを受けるプレー

表4 3時間目 体育の話し合い活動の授業記録より

<p><図2の場面のようなプレーができた後で> T：(パスを出したS1に) どうだった。 S1：S2さんのいるところが出しやすい。 T：それはなぜ。理由を言うと他の人にも伝わりやすいよ S1：S3さんにパスをしようとしても、遠いし、前に守備がいるからパスが失敗しそう。だから、S2さんにパスしました S5：(S2が) いつ動いたかわからなかった。まずいと思ってあわてて追いかけたけど。 S2：S5さんが目の前にいたから、パスできないと思って、(ゴールと反対側を指さして) そっちの方に動いたら、S2さんがいなくて、パスもらえたんだ。 S3：S2さんを追いかけて、守備の人と一緒に動くから、ゴール下は人(守備者)がいなくなる。そしたら、そのままシュートしてもいいんじゃない。 S1：S3さんも、ゴール下に誰もいなくなるように、ゴールから離れてみたら。そうしたらシュートするチャンスができるんじゃない。 S3：そうしてみる。守りを(ゴール下から)引っ張り出すよ。チャンスがあったら、どんどん(シュート)打っていいよ。でも、守備が目の前にいるときは、ちゃんとパスして。 S1：わかった。</p>	
T：授業者	S1, S2, S3, S5：児童
※括弧は、筆者が補足したもの	

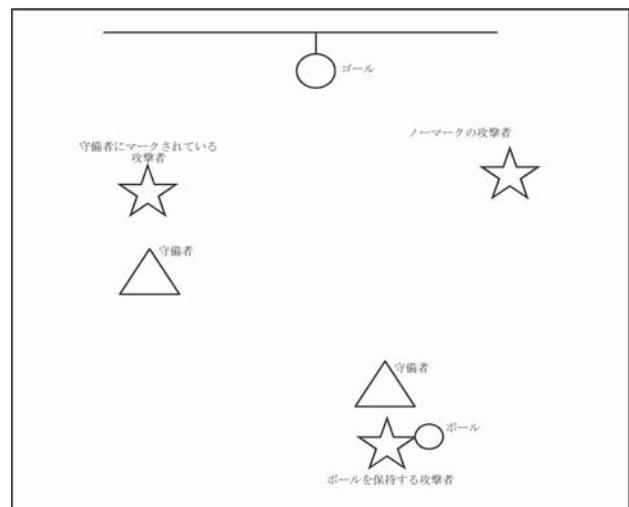


図3 4時間目 児童に示した攻撃者・守備者の位置関係

より「自分の考えや意見を、理由や根拠を挙げながら説明できる」という意識づけがあった。5名の児童からは、「パスする2人の間に守備者がいないようにする」という意見などが積極的に出された。

その後、5人で図3の場面を再現して発表内容の試す時間が設けられた。その中で、攻撃者となった児童は、守備者の前に移動してパスをもらおうとしていたが、守備者との距離が小さいためにパスカットされることが多く見られた。約10分間行った後、授業者が児童を集合させプレーを振り返らせたところ、表5のような話し合い活動が行われた。この話し合い活動の後では、児童たちから「ボール保持者を中心に大きく円を描くように移動

表5 4時間目 体育の話し合い活動の授業記録より

T	今日の課題では、何をねらっているのだろう。
S2	ノーマークでパスをもらおう。
T	だれが。
S2	攻撃する人、みんな。
T	そうだね。守備者にマークされている人ほど、たくさん動いてノーマークなるようにするといいいね。上手にできた？
S5	ノーマークになるように一生懸命動いた。でも、守備にすぐにマークされて上手くない。
S4	S5さんは、たくさん動いているけれども、守備の人の前に出ようとしているだけだから、疲れるよ。
S5	どうしたらいいの。
S4	もっと円を描くように動くとさ、守備がついてこれないから、ノーマークになりやすいよ。
S3	ボール持っている人を円の中心って考えて移動するといいいよ。そうしたら、ノーマークになったときにパスをもらいやすいし。
S1	S5さん、ちょこちょこ（左右に細かく）動かないで、もっと走ってたくさん動いて。そうしたら、パスできるから。
S5	うん。やってみる。
T	授業者 S1, S2, S3, S5: 児童 ※括弧は、筆者が補足したもの

してパスを受ける」ことが提案され、実際のプレーの中でも円を描くような動きがみられるようになった。終わりのゲームでも同様の動きが見られ、守備者が近くにいるときは、積極的にシュートするプレーも見られた。

3. ビデオ映像の観察による分析

国語の授業では、どちらの学年も自分の意見や考えに、理由や根拠を挙げることができるようになっていた。これは、毎時間教科書を使っての復習や繰り返し基本の話を練習することで、学習内容の定着を図ることができたと考えられる。

体育の授業では、これまで授業者が介入して話し合いを進めたり、考えや発想が広がらず授業者が誘導的に発問したりして、課題の発見・解決につなげていくことが多かった。しかし本研究では、表4、表5にあるように、国語科で学習した理由や根拠を挙げる話し方をもとにして、児童だけで話し合いを積極的に進める姿勢が多くみられた。具体的には、「ゴール下に誰もいなくなるように、ゴールから離れてみたら（下線筆者）」「円を描くように動くとさ、守備がついてこれないから、ノーマークになりやすいよ（下線筆者）」などのように、国語で学習した意見や根拠を明確にしなが考えを説明することによって、5人は動き方やその意図を理解でき、自らの思いを相手にわかりやすく伝えることができていたと考えられる。また、国語の授業で5年生はテーマを決める場面、6年生は本の紹介する場面を通して、効率的に意見交換する学習経験から、体育の時間においても、児童だけで短時間で話し合い活動を展開することができ、十分な運動時間が確保されることとなった。

加えて、本研究では、教科を横断させる手立てとして、

国語・体育の授業とも共通の掲示物を使用していた。このことによって、体育の時間でも児童が国語での学習内容を意識して、自らの意見を表明できたと考えられる。

4. 学習カードの内容による分析

すべての時間で児童たちが記述した学習カードの内容から、授業導入時と振り返り時に書いた内容を評価・比較した。主な記述内容は、表6、表7にまとめた。児童の記述を見ると、自分の考えとともに理由や根拠が書かれ、国語科で学習したことが体育授業でも活用できていたことがわかる。また、授業導入時と振り返り時の内容を比較すると、3時間目「横の人にパスする」から「ゴールから離れたところに移動」、4時間目「相手のいないところ」から「空きスペースをねらって円を描くように移動」など記述内容の変容が見られた。このことから、話し合い活動を通して、仲間の意見を取り入れながら、どのようにすればパスが成功するかについての考察を発展させていったと考えられる。

松永ら(2016)は、「自分の意見と理由を発表する表現方法を、直接授業の中に意図的に組み込むことで言語活動を充実」させた結果、意見交流の場面で友だちの発表を聞き、「意見を変えることになったり、自分の意見を強化することにつながる可能性をみた」と報告している。本研究では、国語科で学習した「自分の考えや意見を、理由や根拠を挙げながら説明できる」ことを体育授業においても児童が意識しながら話し合い活動を行い、松永らの報告と同じように仲間の発言を取り入れたり考察を

表6 3時間目の学習カードより

<授業の導入時>	
S1	横の人にパスする。横の人だとノーマークだから、確実にパスが通るから。
S2	相手（守備者）の手の届かないところにいる人にパスをする。とられることや、さわられることが少ないから
S3	マークしていないところ。マークされていないところにパスすると。相手（守備者）がいないからパスが通るから。
S4	横にパスを出す。またぬきなどをしたら、捕られるかもしれないから。
S5	白い線の外（ゴールから離れたところ）にいる人。ゴール下にいる人は、マークされているから。
<授業の振り返り時>	
S1	ノーマークになるように、ゴールから離れたところに移動したことで、守備者を引っ張り出せたり、ノーマークになれた。
S2	ボールを持っていないとき、パスをもらおうとして、たくさん動いたことで、相手（守備者）を引き寄せ、ゴール下に空間を作ることができた
S3	ボールを持っていないとき、パスをもらおうとたくさん動いた。そのことで相手を引き寄せて、ゴールに空間を作れた。
S4	シュートができなかったら、空きスペースをねらってパスをする
S5	ゴール下から敵を外に出すために、自分から外に出たら、ゴール下が空き、シュートしやすくなった。
※括弧は筆者が追加	

表7 4時間目の学習カードより

<p><授業の導入時></p> <p>S1：守備者の前に出てボールをもらう。守備者の前に出たら、パスする二人の間に人がいないから。</p> <p>S2：マークしている人から離れて、ボールを持っている人の横や後ろに動く。相手から離れたほうがパスカットされることがないから</p> <p>S3：相手の前に動く。理由はノーマークになるから。</p> <p>S4：ボールを持っている人に近づく。その方がパスがもらえやすいから</p> <p>S5：人の前にでる。マークしている人の前に出たら、パスする人の間に人（守備者）がいないからパスが通るから。</p> <p><授業の振り返り時></p> <p>S1：守備者と距離を離す。ただボールを持っている人の近くに行くのではなく、円を描くようにすると、守備者から離れやすくなり、パスをもらいやすくなった</p> <p>S2：マークされているとき、いつもより移動してパスをもらえるようにした。そうしたことで、守備者が（近くに）いなくなつて、パスカットされることが少なくなった。でも、すぐに（守備者に）マークされてしまった。</p> <p>S3：空きスペースをねらって円を描くように移動した。パスはもらえるようになったけど、まだマークされてしまった。</p> <p>S4：パスをもらえるように、円みたいに動いた。パスはもらえるようになったけど守備が横から出てきてパスカットされるときもあった。</p> <p>S5：たくさん動いたら、守備をかわせた。S4さんの言ったとおり円を描くようにうごいた。</p> <p style="text-align: right;">※括弧は筆者が追加</p>
--

深めたりする姿が見られていた。このことから、体育科と国語科の教科横断型によって当初のねらいが達成できたと言える。

まとめ

今回の実践では教科横断型学習として、国語における「自分の考えや意見を、理由や根拠を挙げながら説明できる」という学習内容を体育授業の言語活動に位置付けて活用することで、体育授業における話し合い活動の活性化、運動についての考察を発展させる効果について検証した。ビデオ観察及び学習カードの評価から、児童の話し合い活動が活性化され、個および集団の考えが発展したことが確認できた。このことから、国語と体育における教科横断型学習によって、効果的な話し合い活動を展開できたと考えられる。

今回は学級の児童全員についての効果を検証するために小規模学級での実践を対象としたが、今後は普通規模学級でも同様の効果がみられるかについて実践による検証が必要であると言える。

謝辞

本研究はJSPS科研費 JP17K04820の助成を受けたものです。

文献

蛸谷みさ・田中 博之（2015）小学校5年における学級力向上プロジェクトの開発と評価：教科横断的なカリキュラム編成を通して。早稲田大学大学院教職研究科紀要, 7：59-88.

橋本康弘・荒井紀子・伊禮三之他（2011）『教科横断型授業』の開発研究（I）—2008・2009年度協働実践研究プロジェクトでの取り組みから—。福井大学教育実践研究, 11：67-78.

林則久（2003）教科横断的な学習に関するカリキュラム開発～小学校～。神奈川県立総合教育センター研究集, 22：89-92.

石橋文秀・大澤茂男・高木典子（2010）小学校における異教科との合科的・関連的指導用カリキュラム開発—理科と国語の合科授業の1提案。大阪青山大学紀要, 3：9-19.

小林一久（1995）体育授業の理論と方法。大修館書店：東京, pp. 84-85.

黒原貴仁（2015）複式学級におけるゴール型ゲームの実践。体育科教育63（2）：36-39.

教育出版株式会社編集部（2011）ひろがる言葉 小学国語 5下 教師用指導用 別冊（朱書編）。教育出版株式会社：東京, pp. 64-79.

教育出版株式会社編集部（2011）ひろがる言葉 小学国語 5下 教師用指導用 解説・展開編。教育出版株式会社：東京, pp. 182-213.

教育出版株式会社編集部（2011）ひろがる言葉 小学国語 6下 教師用指導用 別冊（朱書編）。教育出版株式会社：東京, pp. 40-61.

教育出版株式会社編集部（2011）ひろがる言葉 小学国語 6下 教師用指導用 解説・展開編。教育出版株式会社：東京, pp. 142-163.

松永康史・中妻正彦（2016）「どっちスピーチ」活動の可能性と課題, 愛知教育大学教職キャリアセンター紀要, 1：43-50.

文部科学省（2011）言語活動の充実に関する指導事例集【小学校版】。

文部科学省（2008a）小学校学習指導要領。東京書籍：東京。

文部科学省（2008b）小学校学習指導要領解説体育編。東洋館出版：東京。

森勇示（2014）「言語活動の充実」への懸念。体育科教育, 62（6）：9.

中島寿宏・秋野禎見・高瀬淳也（2014）へき地小規模小学校におけるICT利用による児童の協働性を引き出す体育授業—クラウドコンピューティングを用いた2小学校間の交流実践—, 運動とスポーツの科学, 20（1）：113-120.

二五義博（2013）算数の計算を活用した教科横断型の英語指導—小学校高学年児童を対象とした英語の数の

学習を事例として一. 小学校英語教育学会学会誌,
13: 84-99.

- 鬼澤陽子・小松崎敏・吉永武史・岡出美則・高橋健夫(2008)
小学校6年生のバスケットボール授業における3対
2アウトナンバーゲームと3対3オープンナンバー
ゲームの比較—ゲーム中の状況判断力及びサポート
行動に着目して一. 体育学研究, 53 (2): 439-462.
- 鬼澤陽子 (2010) ゴール型ゲームの教材づくり・授業づ
くり. 高橋健夫ほか編, 体育科教育学入門. 大修館
書店: 東京, pp. 187-196.
- 白旗和也 (2015) 現行学習指導要領とアクティブラーニ
ング. 体育科教育, 63 (7): 20-21.
- 高橋健夫 (2011) 体育における「言語活動の充実」の展
開方向. 体育科教育, 29 (11): 14-18.
- 高瀬淳也・森田憲輝・中島寿宏 (2014) へき地小規模小
学校におけるベースボール型授業の事例研究. 北海
道体育学会, 49: 13-19.
- 高瀬淳也・中島寿宏 (2015) 少人数におけるICTを活
用した体育授業の実践—5名の複式学級における交
流の広がりを目指したハードル授業事例から一. 教
材学研究, 26: 173-180.
- 全国へき地教育研究連盟 (1998) 学習指導方法の工夫・
改善～へき地・小規模校・複式学級を有する学校の
実践的事例～.

〔平成27年3月24日 受付〕
〔平成27年5月30日 受理〕